

福島ボランティア活動記 2

工藤 康紀 <kkudoh@oct-net.ne.jp>

2011年の東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故からもうすぐ10年になる。すでに忘れてしまったこともたくさんある。今回は初めて南相馬市へボランティア活動に行ったときのことを思い出しながら書くことにする。それが僕の伊方原発裁判の原点になっていると思うから。



2011年7月 拠点となった原町第2中学校体育館

2011年7月南相馬市ボランティアセンターへ

福島県南相馬市原町ボランティアセンターでの活動に初めて参加したのは、2011年7月26日から29日までの4日間だった。当時は交通の便が悪く東京まで飛行機で行き、そこから東北新幹線でまずは福島市へ。そこからバスで2時間以上掛かって阿武隈山地の峠を越えて南相馬市原町区へ。当日は自宅を朝早く出たが宿となる原町第二中学校体育館（当時中学校の教職員生徒は他の地区に疎開避難していた）に着いたのは夕方6時過ぎだった。東京の電車で「どこの山に登るんですか？」と聞かれたことがあった。というのは、持ち物や服装は正に登山へ行く場合と同じであったから。要するに自己完結が必要とされていたので水や食料も持参した。到着して分かったことだが、街には人通りがほとんどなく、子ども達は全くいなくて小中学生等は全員福島第一原発から遠い北の方に避難疎開していた。また、開いている店は少なく、

開いていても午後3時で閉める店がほとんどだった。

災害ボランティアセンター（ボラセン）では受付と同時にオリエンテーションが必ず行われるがそこでの説明に「写真は撮らないで下さい。瓦礫の下に遺体が写り込むこともあります。」と言われて愕然とした。ここはそういう所なんだと改めて思い知らされた。

作業場、馬事公苑へ

ボラセンではその日の最初に作業場所の振り分けが行われる。馬事公苑は「放射線量が1.5 μ Sv/hと高い所なので毎日に行かないで下さい。」と言われたために希望者が少なかった。僕は高齢に近いから気にせず行くことにした。ここは福島第一原発から20km圏のすぐ外側にあり、主に海岸の漂着物の洗浄と整理が行われていた。写真や本の他に位牌や賞状などもあり、それらをキレイに整理しながら

「これらの持ち主はどうしているのだろうか？生きてのだろうか？」と不思議な気持ちになった。その馬事公苑の広い駐車場からは立入禁止区域にある自宅に避難者が「一時帰宅」するためにバスが出ていた。全員が白い放射線防護服を着て不安そうにバスに乗り込んでいたことを思い出す。現在の馬事公苑は通常に戻り相馬野馬追の時など大変な賑わいとなっている。

放射線のことでは、津波で流れ着いた土砂からも放射



馬事公苑の前、20Km圏の立ち入り禁止境界

線が出ているとのことで、土嚢袋に入れたまま家の前に放置した。片付け場所が決まってないとのことだった。

初回のボランティア活動の最後の日に初めて海岸線にいった。そこには家やたんぼがあったと思われるところが跡形もなく津波で流されてガレキや土砂だけが残っていた。海とたんぼの境さえ分からないような状態だった。

その後、その地域は一時的ガレキ置き場となり、今(2020年8月)では防潮堤ができて太陽光発電のパネルがびっしりと並んでいる。(続く)



2012年10月 家の前に積み上げられた放射能を出す土嚢袋



2012年10月 原町区のガレキ



2011年7月 原町区の海岸



2020年8月 原町区海岸の堤防遠方に福島第1原発が見える



2020年8月 原町区海岸に並んだ太陽光パネル